

LIVE: 狂乱 1994.1.16 高円寺屋根裏II

「SOS」の1月号は、狂乱が特集で、この記事ではじめて狂乱というバンドを知った。インタビューを読むと「東京のライブハウスに出演するのはすごいもんなんだろうなって結構期待があって、実際来てみたら、なんだっていうか」（英郎）とか「インタビューは前からやって欲しかった。こっちから言えるのは歌だけだ。他にも何でも聞かれたら、べつに自分たちに矛盾はないから、何でも答えられる善だから」（ジュン）とか言っている。これだけのことを言う人たちのライブを見てみようと思った。

スーサイドのマーティン・レヴは「君がもし社会に対して何かを感じてそれを表現したいと考えた時、君は“自分流”の様式に沿って表現していくべきで、過去の人達の模倣に終ったとしたらそれは何ら自分の時代を反映してないものだ」と言っているが（下記のINTERVIEW参照），“自分流”の表現というのは自分を底の底まで探ってはじめてできるもので、その結果、自分という人間が生きている「時代と背景と人生」が自ずから浮かび上がってくるのである。だから極めて個人的なことの表現が、社会性を持つことになるし、時代を反映することにもなる。社会のことを歌えばそれが社会的な歌になるのでも、時代を反映するのでもないということである。

70年代に、その時代に生きた人間が自分の底の底を探ることとそこに新しく出現したもののひとつにバンクという言葉があられた。バンクという言葉はその新しいものの出現のあとにできた。だからバンクをやるということはアラン・ヴェガの言う「70年代バンクの流用」にすぎないことになる。「東京でやるようになって、いつもブッキングされる場所がやっぱバンクって、その中になつたりするんだけど、そこで色々なんか君達おかしいんじゃないの？って」

（ジュン）「反戦だあーとか言っても、何か、嘘くさいじゃない。元にあるバンクっていうものがそういうものやってたから真似してみただけ一みしたいな。そういうのしか見えないから…」（英郎）と言うのはもっともなことだし、狂乱はそう言えるだけの“自分流”の様式を持っている。“自分流”の様式の表現には既に成文化の区分けがあてはまらないから、狂乱を説明するのは難しく、「なにしろ独特で強烈。ライブを見たあととふるえがとまらなかつた」としか言えないが、狂乱には現代詩の誕生を見る思いがすると言うことはできる。詩の区分けとしての現代詩ということではもちろんなくて、まさしく現代の詩としての現代詩の誕生である。すべての命がその誕生の瞬間に持つエネルギー。その命だけが持つ独自性、すなわち唯一無二の存在。それに、詩というものが持つ衝撃力。それらすべてが感受される。「もし俺が詩を書いたとして、普通に誰かに読ませたとするじゃない。そうしたときに「ふうん」て感じに終わるかもしれないけど、それに曲を乗せたら「ああ、こんなに重いんだね」って言われることである。でもこっちからすれば、元々そういう重い思いで書いているから、ほら分かったかって感じで」（英郎）「音も重要な感情ですね」（ジュン）と見事に言いきっているが、逆に、元々詩になっていない歌詞ではいくら曲を重くしても衝撃力はないということになる。そして、詩になっている歌詞が曲（その曲は歌詞がよく伝わるように演奏されなければならないが）に乗ったときの詩が持つ衝撃力は圧倒的で、詩という形で書かれたほとんどの詩からはとてい感受されないものである。

「反戦だあーとか言っても、何か、嘘くさいじゃない。元にあるバンクっていうものがそういうものやってたから真似してみただけ一みしたいな。そういうのしか見えないから…」（英郎）と言うのはもっともなことだし、狂乱はそう言えるだけの“自分流”の様式を持っている。“自分流”の様式の表現には既に成文化の区分けがあてはまらないから、狂乱を説明するのは難しく、「なにしろ独特で強烈。ライブを見たあととふるえがとまらなかつた」としか言えないが、狂乱には現代詩の誕生を見る思いがすると言うことはできる。詩の区分けとしての現代詩ということではもちろんなくて、まさしく現代の詩としての現代詩の誕生である。すべての命がその誕生の瞬間に持つエネルギー。その命だけが持つ独自性、すなわち唯一無二の存在。それに、詩というものが持つ衝撃力。それらすべてが感受される。「もし俺が詩を書いたとして、普通に誰かに読ませたとするじゃない。そうしたときに「ふうん」て感じに終わるかもしれないけど、それに曲を乗せたら「ああ、こんなに重いんだね」って言われることである。でもこっちからすれば、元々そういう重い思いで書いているから、ほら分かったかって感じで」（英郎）「音も重要な感情ですね」（ジュン）と見事に言いきっているが、逆に、元々詩になっていない歌詞ではいくら曲を重くしても衝撃力はないということになる。そして、詩になっている歌詞が曲（その曲は歌詞がよく伝わるように演奏されなければならないが）に乗ったときの詩が持つ衝撃力は圧倒的で、詩という形で書かれたほとんどの詩からはとてい感受されないものである。

「反戦だあーとか言っても、何か、嘘くさいじゃない。元にあるバンクっていうものがそういうものやってたから真似してみただけ一みしたいな。そういうのしか見えないから…」（英郎）と言うのはもっともなことだし、狂乱はそう言えるだけの“自分流”の様式を持っている。“自分流”の様式の表現には既に成文化の区分けがあてはまらないから、狂乱を説明するのは難しく、「なにしろ独特で強烈。ライブを見たあととふるえがとまらなかつた」としか言えないが、狂乱には現代詩の誕生を見る思いがすると言うことはできる。詩の区分けとしての現代詩ということではもちろんなくて、まさしく現代の詩としての現代詩の誕生である。すべての命がその誕生の瞬間に持つエネルギー。その命だけが持つ独自性、すなわち唯一無二の存在。それに、詩というものが持つ衝撃力。それらすべてが感受される。「もし俺が詩を書いたとして、普通に誰かに読ませたとするじゃない。そうしたときに「ふうん」て感じに終わるかもしれないけど、それに曲を乗せたら「ああ、こんなに重いんだね」って言われることである。でもこっちからすれば、元々そういう重い思いで書いているから、ほら分かったかって感じで」（英郎）「音も重要な感情ですね」（ジュン）と見事に言いきっているが、逆に、元々詩になっていない歌詞ではいくら曲を重くしても衝撃力はないということになる。そして、詩になっている歌詞が曲（その曲は歌詞がよく伝わるように演奏されなければならないが）に乗ったときの詩が持つ衝撃力は圧倒的で、詩という形で書かれたほとんどの詩からはとてい感受されないものである。

狂乱: ジュン (Vo) 見嶋 (Dr) 英郎 (Ba) ナカガキニシニシ (Dr) 写真: 英郎



狂乱: ジュン (Vo) 見嶋 (Dr) 英郎 (Ba) ナカガキニシニシ (Dr) 写真: 英郎

ジュン: とにかく最初が…だから気持ちでバーンと感じちゃったから、やっぱそういうのも、東京でやるようになって、いつもブッキングされる場所がやっぱバンクって、その中になつたりするんだけど、そこで色々なんか君達おかしいんじゃないの？って（笑）

英郎: 最初、東京に来る前に結構期待してたっていうか、すごいもんなんだろうなって結構期待があって、実際来てみたら、なんだっていうか。その反動で、一気にそういうのを否定するような感じの時がその頃はバンクと出て、最近はどういう感じか

英郎: 環境がやっぱ左右するな。やっぱその中で感じたこと言うから。東京出てきた頃は出てきた頃でその時の事言ってるし、今は今までのこと言ってる

ジュン: 悪い状況中の時は、やっぱその中でそういう事ばかり行くだろうし。普通にこう日常に暮らして、電車の中で…電車嫌いだし…（笑）。そういうのとかも影響する。やっぱ、見たり聞いた知識よりも自分達で感じることでかかっているんじゃない？何か実味のない人達がが多かったから

英郎: 思っていないことを言ってもねえ。そんな格好よくないじゃない。反戦だあとか言っても、そりゃ反戦と分かるけど、戦争嫌いだ。何か、嘘くさいじゃない。元にあるバンクっていうものがそういうものやってたから真似してみただけ一みしたいな。そういうのしか見えないから…。真刺しバンドとかやってくる人でろくなくはないって思うけど、「真刺し」って意味もまた色々聞かされるけど。



（右の）... 狂乱のライブは、もう一つの面白さがある。それは、メンバーたちが、自分たちの音楽を、ただの音楽としてではなく、自分たちの生活の一部として、そして、自分たちの感情の一部として、演奏している点にある。彼らは、自分たちの音楽を、自分たちの生活の一部として、そして、自分たちの感情の一部として、演奏している。彼らは、自分たちの音楽を、自分たちの生活の一部として、そして、自分たちの感情の一部として、演奏している。彼らは、自分たちの音楽を、自分たちの生活の一部として、そして、自分たちの感情の一部として、演奏している。

INTERVIEW

スーサイド NY ハンクの伝説のカリスマ、アナーキー・クラブの帝王、しかしその帝王のライヴは、50年代の頃のあの熱い気持ちを、狂乱のライブでも感じたい。その思いを、狂乱のメンバーたちに伝えた。狂乱のメンバーたちは、その思いを、狂乱のメンバーたちに伝えた。狂乱のメンバーたちは、その思いを、狂乱のメンバーたちに伝えた。

アラン・ヴェガ (Vo)
マーティン・レヴ (Key)
▶ どうでしたか、日本公演は。
アラン「うーん、楽しかったよ」
▶ 日本の観客は少々戸惑ったようですか。
アラン「まあね、ちょっと静かだったね。でも初めての所じゃどこでもそんなものだ」
▶ スーサイドというショッキングなバンド・ネームの由来は何でしょう。
アラン「お前の番だよ」
マーティン「世界が、昔も今もそうだけど、絶え間なく破壊に向っている象徴だよ」
アラン「最終的には人々の物欲とか価値感等のバランスを取らないと世界は破壊するだけだからね。おしまい、てやつ。勿論、これは我々個人にも当然言えることだけ」
▶ 80年の解散後の活動はどうですか。
アラン「別に解散なんかしてないよ」
マーティン「結成はいつもしてるよ。この形が僕らの基本だからね。思考や行動の原点となるところ、核心なんだよ」
アラン「つまり中心てこと」

▶ ……、現在のミュージック・シーンについて、どう思いますか。
アラン「くせえっ、最低だね（と言って鼻をつまみ手を振る）」
マーティン「一種のサイクルだね。ある形態のものをやりつくすには25-30年かかるものであって、ロックもそうである、と。今でも無駄な事だけだと細々と残りをやっているよ」
アラン「当世流行っているのがボン・ジョビなんだぜ。それだけで解るぞ」
▶ 彼はN.Y. バンクを振り返ってどうですか。
マーティン「前衛的な連中が出てきた時点でどうその表現形態は終わるんだよ」
アラン「当時出現したグループこそ創始者だったわけだ。しかし一旦動きが止まるともう見かけだけのものが出てくる。コピーだよ。ムーヴメントが終わればその第2世代が出てくるのは当然だが創作的とは言えない」
マーティン「どういう衝動を生み出すか、ということが、そこから何を引き出し、重ね合わせるかという問題にすり変わるんだね」

アラン「ほら、さっき街頭で、ラフィンなんとかいうそれっぽい音楽をやっていた。それは所謂70年代バンクを流用したものでしかなくて、俺達よりはるる日本にきたその日に見かけてしまうということだよ。そう、これが結束であり、単なる延長線上の安んずだね」
マーティン「君がもし社会に対して何かを感じてそれを表現したいと考えた時、君は“自分流”の様式に沿って表現していくべきで、過去の人達の模倣に終ったとしたらそれは何ら自分の時代を反映していないものだよ。オリジナルな人達は、彼ら自身の時代と背景と人生と、政治的社会的なものによって表現しているのに、例えそれを何十年もたってもまたやったりしたら、それ自身が上手い作品に仕上がったとしても社会的な意味は全く見出しえない」
アラン「コピーは駄目だ。既になされた事は忘れて新しいものを創造しなかつた。今日だって俺にしてみれば新しく人生を始めようって感じなんだよ。常に新しいものに対して前向きに取り組みたいし、朝起きた時、毎日が新たな人生への出発で欲しいね」

WORDS: 間章

「僕はランチにだけはける」より
(Suicide は) 歌をうたうときには、まともそーに、まともそーにやりながら、実はこっちをノイローゼしようともくろんでいるのだから、なかなかである。僕はこのグループを一番楽しんで、そのどうしようもない感じがニューヨーク的なので気に入った。(1976年)
私はセリヤを思い浮かべることのできる本当にくびのグループ、本当にアナーキーなグループを一つだけ知っている。それはスーサイドという二人だけのグループだ。彼らがレッド・スターというマイナーから出したLPはこの一年で傑出したロックのなかで二度度同じように驚きささを感じたたった一枚のアルバムだ。もともと彼らの実際の演奏（それが演奏で、音楽だなんて本当には思えない）を聴いたら、レコードはきれいにできあがりすぎているけれども、最高にアナーキーな風が吹いている。彼らは本当に自分たちを壊し、音楽を壊すために演奏している。「フランク・ティア・ドロップ」という曲などがどきどきでも覚め切ったところで、決してこけおどしの狂気などによってではなく毎夜のように自分たちを切りきざんでいることを実感させる。(1978年)